補説第九　黒田清輝と関東大震災

絵画「湖畔」によって著名な黒田清輝は一九二三年九月関東大震災が勃発するや、貴族院議員として被災者への視察・救済を統率し、同年十二月激務のため倒れた。病室で描かれた「梅林」（未完成）が彼の絶筆である。この絵画は上野の東京国立博物館黒田記念館に解説を付して所蔵される。

大正十二(一九二三)年末に黒田は宮内省に出勤中、狭心症でたおれ、翌年春小康をえて箱根に静養、五月下旬帰京、七月十五日歿したが、春、小康をえたころは麻布笄町の別邸の離れが病室にあてられていた。この作品はそこから庭を見て描いたものと思われる。筆致はわずかで、ペインティング・ナイフを用いて描かれているが、一種異様な雰囲気をもち、観る者にさまざまな最後の黒田像を思いおこさせる、絶筆となった作品である。①

大地震が襲った九月一日、清輝は麻生笄町の自邸で正午前の入浴中であった。烈しい揺れにも自若として、屋外の情景を眺めたと伝えられる。その二日後側近の画商、仲省吾を伴って被服廠跡の惨状を視察し、やがて渋沢栄一主宰による大震災善後会へ参画した。被災から発病に至る彼の動静について、仲編纂による雑誌『国民美術』（黒田清輝先生追悼号）にはいくつかの証言が見出される。

① 黒田記念館『黒田清輝作品集』、図録一四六「梅林」解説 online.

仲章吾「黒田先生を憶ふ」

私が初めて先生に御目に掛りましたのは、中丸精十郎氏の御紹介で今から二四年ばかり前と記憶致します。笄（こうがい）町の邸内に居住する様になったのは七年前からです。〔中略〕思へば大震災当時は中々の御元気で災後三日目被服廠跡の見物に御供をしました。九月中は先生のお宅に居候をして居りました。夕飯の時などは中々の御元気で、今に目に見える様な気が致します。越えて十二月御病気に罹られてから、私には以前と違って先生と相互の感応が不明瞭になってきました。これは先生になにか、御変りが生ずる前兆ではないかと心配はじめまして一、二友人にまで洩らしました。其の後益々妙に感ぜらるる事のみ多く独り悲観して居りました。それから本年の四月二八日、坂井義三郎氏の祝賀会が上野に催さるる其の日の朝御病気再発の急電に接して箱根に赴きましたら、凡ての御状態が尋常でなく、五月四日迄御付きして居ましたら其の間日々の御談話中何かを予感せらるる様な御口吻が多くありましたから始終御警戒申し上げて居ました。

其の後自分は不幸にも五月中旬より熱病に罹り自宅に引籠り四十日ばかり御目に掛る事が出来ないで居ったのですが、なんだか御容体が面白くない様に感じられましたから離床は少し早すぎましたが突然（六月二五日午後二時）御病床へ御伺いましたら意外にも不安の御容貌が明瞭に顕れて居られましたから早速自分と

して先生に対する最後の最善なる手段を御尽し申し上げました。　①

岡常次「故黒田先生の御日常に就て」

先生は昨年七月三一日に平河町の邸から麻布の笄町の別邸へ避暑の意味で引き移られた処が少しの避暑気分も味ふ事も出来ず毎日炎天の中を政治客や其他の訪問客の面会で忙殺され家人が鎌倉の別荘へ行く事をすすめても同僚の青木氏や水野氏が毎日働いて居るのに自分だけ鎌倉などへ行けるかと一蹴に付してしまわれて不相変政治、美術方面に活躍なされて居た所が、九月一日の震災以後益々御多忙の日を送られるようになったのである。震災で思ひ出したが地震の最中は湯殿に居られ御身体をお洗ひになって居た時地震と共に家人が避難をお進め致しても非常に御平気で窓から外を眺めて居られると云ふ沈着な態度で私の父などは一驚した次第である。此の震災によって先生の葵橋研究所も遂に焼亡したが、私が同所の幹事をして居た関係から早速地主へ研究所の敷地を無条件で返還する様申渡されたのも先生が世間で俗に云ふ利権など捨てて罹災した地主に同情した清い御心からと思ふ。そして其の当時は毎日弁当もちで大震災善後会へ御通勤被成て居た。十一月の中頃に咽喉がはれ上って何も食べる事が出来ず一週間も御困りでしたが、其も快方にお向いになされたので皆々安心した処十二月二日に宮内省で狭心症を突然起されたが、其翌日御無理にまたご外出なされたため強度の狭心症を起され永い御病床にお就きになったのである。

① 仲章吾「黒田先生を憶ふ」『国民美術』第一巻第九号（黒田清輝先生追悼号）大正十三年九月、六二頁。

御病気中にても見舞客の答礼其他役所向きの事美術方面の事なども一一指図されて決して我々に勝手に取計らはす様な事なく電報の仮名遣ひに到る迄注意なされた程です。四月頃から一時快方に向ひ庭園に出られて植木屋の指図をなさる事を非常にお楽しみとなされ箱根湯本へも一週間も行かれた程になられた。箱根から帰京されたのが五月三日で其時は印度支那総督来朝歓迎の主人役として無理に出あるかれたので六月三日に喘息を起され、其から再び御病床に就かれ遂にかなしきことになった次第である。

先生の御壮健当時には朝平常用向きの少ない時は大抵十時頃起きられたが、宮内省の御用其他官庁の御用の時は必ず時間迄に先方に御出なされ少しも時間を間違える様な事はなかったと思ふ。御宅に御出の時は画室にお入りになり絵をおかきになる外は書類の整理を夜遅く迄一人でこつこつなされ、其間には庭に出て植木屋をつかって先生流の庭造を楽しみとなされた。家庭に於いての先生は一寸外部からの想像する事が出来なかったと思われ、そして又一方に情け深い心をおもちになられた。夜御寝前にはいかなる日でも邸内の氏神へ参拝し、其日の事を御報告なされる長い間の慣習で其時間の長短はあったが病気の他は一日として欠かした事はなかった。　①

輸入絵具を扱う画商であった仲章吾は、大正三年黒田清輝の支援を受けて神田小川町に画廊流逸荘を開設した。ここではまず黒田自身の小品などが展示され、その後白樺派主催の展覧会や陶芸家バーナード・リーチの個展等が催される。流逸荘には国民美術協会の事務局も付設され、仲がときには麻布の黒田邸に寄宿して美術分野の活

① 岡常次「故黒田先生の御日常に就て」『国民美術』（黒田清輝先生追悼号）、四頁。

動を補佐していた。大震火災の際流逸荘は全焼するが、美術協会の重要書類は彼の機敏により救出される。①

病床の黒田について語るいまひとり、岡常次は葵橋洋画研究所の主任研究員であった。白馬会によって設立されたこの養成所では画技の修練に加えて絵画史やフランス語も教えられ、若き岸田劉生や木村荘八が研鑽を積んだ。画家として岡は大正三年油絵「友の顔」で光風会初入選を果たし、震災時には学習院大學の講師をも勤めた。中学校の授業でエッチング制作を教えたのは彼が最初と言われる。②

黒田清輝は、島津藩士黒田清兼の子息として慶応二年鹿児島で出生し、七歳にして伯父黒田清綱の養子となった。幕末の山陰道鎮撫の際西園寺公望の参謀であった清兼は、維新後元老院議官に任じられ、やがて子爵として貴族院議員や枢密顧問官に列せられる。明治五年養子の清輝も上京して麹町平河町の清綱邸で育てられ、『大學』の素読を始めるとともに、まずは新設の赤坂小学校に入学する。その後神田の共立学校等で英語とフランス語を学び、明治十八年海外留学に出発した。③ フランスにおける十年間の勉学を経て帰国し、まもやく久米敬一郎等とともに洋画振興のため天心道場と白陽会を設立する。隈元謙二郎による画集と伝記『黒田清輝』は、画家としての研鑽や業績について精細であるが、本稿では黒田と並ぶ明治画壇の重鎮藤島武二の回想を紹介する。

① 横須賀雪枝「流逸荘と仲章吾ー大正時代の初期画廊をめぐって」『大正イマジュリイ』第三号（二〇〇八年三月）、八七ー八八、九〇ー九一、九五頁。

② 「近代日本版画家名覧」五頁。版画堂 online.

③ 隈元謙二郎著『黒田清輝』日本経済新聞社、一九六六年。三ー五頁。

藤島武二「黒田清輝君を語るー人、並に業績としてのー」

黒田君の昔に就いては私はその多くを知らない間柄であった。が君は十八九歳の頃、政治並に法律研究のため渡仏留学したのであったが、中学校も先方でやり、それ等の課程の中、画の方面への天才の閃めきが当時洋画研究のため巴里に滞在中の山本芳翠氏の発見するところとなって終に政治法律への志を画の方へ転換したと聞いている。初めて芸術家になろうとした動機は斯く簡単であった。

その以前に巴里では今一人藤といふ人がゐてラファエル・コランに就て教へを受けてゐた。当時コランは歳も未だ若く、美術の流派としては寧ろアカデミックであったが、一方印象派が勃興しかけてゐた際、外光の研究にも没頭しその点でも特色があった。さうしてその画から来る優美な感じが日本人の趣味に非常に適していた。そのコランに認められ、前途有望だと折紙を付けられたことによって君の気持は全く専門に美術で立たうといふ方向に傾いた。

私も郷里を同じくすることから、留学の留守中もその邸宅に出入りし、未だ見ぬ先輩の評判がチラホラ日本での我々の耳にまで入ることを喜んだ。又時々巴里から日本に送り越したそれ等の製作品にも接した。私はまだ一面識もない人であったがその画には非常に敬服した。文通によって交際を求めたのもその頃である。

丁度明治二六年であった。十年間の留学を了へて君は初めて日本に帰って来た。人の噂やまた実際に名声を得てゐる人に親しく接して指導を受けようと喜んでいる折柄であったが、私は学校の教員として地方に行くとになってゐたため、それも終に出来得なかった。私は二九年になって再び東京に帰ることになった。そ

れは丁度若い人達がこの新帰朝の先覚者を迎えて指導を仰がうとしてゐる際であって、その中には岡田三郎助、和田英作の両君なぞもゐた。

二八年に至って洋画界の気運は熟して来、黒田君と共に帰朝した久米桂一郎、外に山本芳翠氏、岡田、和田その他の人々を加へて洋画団体の白馬会が初めて組織された。その頃フランスで最も盛に流行していた印象派ー本来コランは本当の印象派の人ではなかったが、マネーとかモネーとかが印象派に依って盛に勃興し始めた際であるので自然新進気鋭の黒田、久米の両君なぞも深くそれに興味を感じ其方をも研究した。曾て見たこともない新生命を持った印象派の芸術に接して人々は驚きの眼を見張ったわけである。さういふわけで黒田、久米両君のもたらした新芸術品は殆ど在来の日本の洋画界を風靡して此処に新生命を移植したのであった。それもそうであろう。この印象派は日本に於て驚異であったのみならず、欧州に於てさへも当時最も新しい芸術であって未だ一般に了解されない中に迫害を受け悪評を放たれてゐた位であるから。が然し、ごく清新な、熱心な研究から生れた芸術はすべてに影響してゆかでは置かなかった。日本の芸術界の幾多の変遷のある中にあっても、其流派の如何に関らず黒田君等のもたらした印象派の前にはすべて多少の影響を受けないものはないといふ位であった。この点は大に特筆すべき黒田、久米両君の功績と云っていいかと思ふ。

その後、明治二九年以来美術学校の教授として初めて美術学校に洋画科を起し、専心学生を薫陶された功績、その他、帝展、国民美術協会等の事に就ては今更贅言を要するまでもない事柄である。

◇　◇

君は近年政治方面にも留意されつつあったが、これはその仏蘭西留学の当初に於て政治法律を学ぶといふ

目的であった位であるから本来からの興味がそこに再発したものであるう。貴族院に入り研究会の幹部としてその方面に努力活動せられ、自然芸術の方には多少遠ざかった傾きがあった。が然しそれは自ら創作しないといふ程度で芸術の方面にも絶えず大小となく心を用いてゐた。又近年政治に没頭して世間的には甚だ得意に見えたが、晩年のその行動が果して同君本来の面目であったかは、私自身としては甚だ疑問とせざるを得ない。

波瀾屈曲に富んだ境地に自ら身を置くもまた人生の一快事ではあるが、悠久の芸術の前には空中の一指弾に過ぎない。吾々は政治家の黒田ではなく、矢張り美術界の一巨星として永遠に彼を記念したいのである。若し夫れ古来美術史上に此類型を求めたら、画家にして政治的手腕を揮ったリューバンスやヴェラスケス等の如く一見相反せるが如き素質の両面を兼有してゐた。壮年時代の同君の作品には今尚吾々の激賞に価するものが少くない。

一方健康状態に就ては年来の宿痾が君をして画筆を捨てて政界に走らしめ、不相応の身心過労が君の天寿を縮めた観がある。尚君の政治生活に入ることが余りに遅くかつ不幸にして余りに短かったのは遺憾である。

〔中略〕私が君の晩年の心事を追懐して衷心悲しみに堪えないのは此点である。只死期の迫れるのを忘れて極力尽瘁した日仏関係は大に其曙光を認められると同時に君の死に因て一頓挫した観はあるが、終焉数旬前仏国政府より贈られた高級勲章等を親しく見て死んだのは君の最後を飾った華として、せめての心遣りとするに足るものがある。

近年帝国美術院長に任命されて以来、この方面にも非常に尽力し、且つ実現させたい計画や理想も多く持ってゐた事であろうが、其半も実現されないでたおれたのは遺憾此上もない事で美術界にとっての大きな損

失である。

◇　◇

人として君を観る時は、君は非常な淡泊な性格で、何事をするに当っても一点の私心といふものはなかった。然し自分の信じたことは必ず曲げないで実行して行くといふ気概があった。往々世間から誤解される様な事があったのも其為めであったが、人格高潔で、芸術家としては豊かな天分とそれに付加するに高等の教育を受けて居り、常識に富んだ人であった。だから単に芸術界に於てのみならず、政界に於ても研究会の領袖として重きを為してゐた次第である。その他いろいろ特長を持ってゐたがフランス語の正確な教養は、美術家仲間は勿論の事一般に於ても一寸類のない位であった。兎に角少しも気取らない動作の裡に自ら節度ある君の態度は実に立派なものであった。それが亦政治方面、外交方面に重宝がられ、過度の繁忙がその健康を奪う因をなしたと見ることも出来よう。

①

大正六年養父黒田清綱の逝去に伴って清輝は爵位を相続し、やがて貴族院議員に互選される。以後同院の最大会派研究会の幹部として議会への出勤や政界での活動に多忙となる。フランス留学の時点から三七年にわたり綴られた『黒田清輝日記』は、惜しくも大震災の八ヵ月前に途絶するが、政治家黒田の一端を知るためその前年に遡り、一月二八日以降の一週間を参照する。この時期には貴族院における連日の会議や会合に忙殺され、最大会

① 藤島武二「黒田清輝君を語る―人、並に業績としてのー」『国民美術』（黒田清輝先生追悼号）、九―十一頁。

派の領袖青木信光とは頻繁に同行する。また、フランスからの国賓ジョイフル将軍への接待にも尽力して、画業をめぐる記述は一月二九日の夕刻のみである。なお、ジョイフル将軍は第一次世界大戦においてドイツ帝国のマルヌ侵攻を阻止した功績で称えられ、皇太子（昭和天皇）のヨーロッパ歴訪後返礼として来日した。

『黒田清輝日記』一九二二年（大正十一年）一月―二月

一月二八日　土　晴　午前本会議　正午過研究会　午後一時議長室ジョツフルの件　近衛公及内相（於議院内）

一月二九日　日　曇　夜雪　六時はなや内相の招宴　往青木復小笠原　青木　夕刻雪景写生　仲氏来　青木子同道　午前十一時黒田侯訪問

一月三十日　月　晴　午後二時半会館ジョツフル元帥歓迎　夕刻佐成氏来　六時半築地新喜楽（頼寿伯）本日三回共青木・牧野の二子と　夜喜楽の帰途青・牧及坂井の三子と同道　神田の書店に寄る　徳川公帰京十一時五七分

一月三一日　火　晴　六時半陸軍大臣晩餐　各派交渉員　九時頃散会　総会研究会五時　会議十時―四時半　午餐於議院　議事散会後議長室に於てジョツフル歓迎打合及決議文翻訳の件　本日も往復共青木子自動車同乗　十二時渡辺氏来

二月　一日　水　晴　午後一時ジョツフル来院二時前終　零時五十分参集皇族室　午前小笠原伯の自動車にて青木子も同伴十時登院本会議　加藤恒忠君と書記官長室にて近衛公演説仏訳の訂正をな

す　二時ー五時紫川荘　後水・青二子と山口氏訪問

二月　二日　木　曇　夜雨　日仏午餐会十二時半会館　ジョツフル招待会費七円　頼倫侯　三時ー八時半

小笠原伯　九時過より十時半青木子　のち大塚へ廻はる

二月　三日　金　雨　薩藩出身両院議員懇親会三縁亭六時ー八時　本会議四時過まで　南次官を文相邸に

尋ぬ　飯倉侯爵邸　自宅小集例の四人　①

雑誌『国民美術』には政治家黒田への追悼もいくつか収録されるが、青木信光は彼の適性と勉励を述べ、松岡洋一郎は知られざる逸話を語る。青木は貴族院の実力者として貴族議員と政党勢力の提携を説き、原敬内閣や清浦奎吾内閣の成立に深く係わった。また、フランス留学八年の経歴をもつ松岡は、大正七年特使西園寺公望の随員としてパリ講和会議に参加している。

青木信光「政治家としての黒田子」

黒田君の政治の方面へ関係し出したのは、たしか大正九年からであって、今日迄まず四年間位のものであった。もう少し時があれば、君の此方面の力は大に現れたであろうと、我々は大に遺憾に思ってゐる次第である。

君が議員に出られた時は、已に社会上の地位、名誉は充分に持って居られたのであるから、我々の会に入られても、直に常務として枢要なる地位に立たれ、種々の重要なる相談にあづかられる様な次第であった。君は一体名利に対しては、淡泊な考えを持ってゐられたのと、其境遇上の関係から、会務の事でも役員たることを希望するとか、何とかと云ふ様な考へが無かった。その点が凡ての問題を解決する上に、非常に都合がよかった。

黒田君は非常に勉強する人で、美術の方は勿論、宮内省の方では殿下とか宮様の御用が種々あった様であるし、それに外務省の事、特に日仏関係に就ては、種々の機会に於て大に尽力せられる所が多かった。外交美術と云ふか、これ等に就ては常々考えて居られと見えて、時折はそう云ふ様な話を聞いた事もあった。

同君は却々説のある人であったし、又よい考えを持って居られた。然し自説を固守すると云ふ風な人ではなかった。種々議論の結果、自分の説がたとへ用いられなくても、何の不平も無く、周囲の人とよく協和して、事を進めて行かれた点は、共同生活の上に非常によい性格を持って居られた。かう云ふ点でも中々得難い人であった。〔中略〕

同君は永らく外国に居られたので、外国の事情にも通じて居られた。これが政治上に必要な事であった。外務省の外交問題等についても色々心配して、情報部を改良してもっと効果のある様にしたい等と話して居られた。具体的の意見は聞く機会がなかった。種々考えがあったことと思ふ。

外国の事情に明るいのみでなく、人に対しては外国風に其人を満足させる風があったので、病気中なぞも遠慮して、余り行かない様にしてゐた。自分が病気であるに係らず、我々が見舞に行けば、床の上に起き上がり、自分で何かいろいろするのみでなく、心をもんで傍の人に、種々注意されると云ふ風で、定めて疲れ

① 『黒田清輝日記』第四巻、中央公論美術出版、一九六八年。（東洋文化財研究所 online）

るだろうと思ひ、又昂奮されるといけないと思うので、世間話なぞした位で帰ったのであったが、遂々立たれなくなって了った。（談、在文責記者）　①

松岡新一郎「外交家としての黒田子」

黒田子爵とお交際をする様になったのは、最近の事で、主に日仏交換美術展の時からであったが、短かい間の割りには非常に親密になったと思ふ。これは子爵の政治方面、殊に日仏間の外交問題に就いて同様の立場にあり、又互に理解する点が一致したのと、一つには同郷であったと云ふ様な事であろうと思ふ。〔中略〕

子爵は西園寺侯に可成り若い時代から、非常に愛せられて居られた。政治に関係する人達の間の通弊として、政界の巨星と一寸知り合ひの同柄でも相当背景に用いる様な事から、ややもすると吹聴されるものであるが、私が西園寺侯と可成り近い同柄であるにもかかわらず、遂に一言も侯の知遇の事を語られなかった。此の事は政治関係者として珍しいと思ふ。

子爵は政治的の仕事はお好きであった。然し其為に名利を求めるお考えは全然なかったのである。其最も有力なる証左となる事は加藤友三郎内閣の時、研究会として文部大臣に擬せられ、可成り話しが濃厚になった時分、私にも相談の様な事があったが、先生は研究会の同僚に対して、「私は研究会にそんなに役に立ちませんかね」と言われたさうであるが、此の一言は会の人々をして、非常に感動せしめて、文部大臣説を撤

① 青木信光「政治家としての黒田子」『国民美術』（黒田清輝先生追悼号）、二四―二五頁。

回するに至ったと言ふ事であります。

子爵は又政治家として非常に細心の人であった。クローデル大使は私に、子爵を賞揚して色々の話をされたが、其中に子爵は会話を非常に正しく運ばせる人である。普通誰でも言い返しをするものであるが、黒田子は言ふ時には少々ためらった様に遅い感じがあるが、これは非常の細心で考えつつ話してるので、一度言ったら言い返しをせぬから、会話は遅いが、其の分量は非常に多い人であったと云って居られた。子爵は多くの人々から、何所か無邪気な様な可愛いい点で、非常に敬愛されてゐたが、クローデル大使の如きは、敬愛もし信用も並外れた程度で、非常に力にして居られた。

メルラン総督歓迎の席上の、クローデル大使の演説の中に「黒田子は画家である。私は詩人である。この芸術家同志と理解と握手による国交は最も確かな信用の出来るものであると云ふ様な意味の事を言われた。実際芸術家は人間として最も感情のするどい人であるに反して、政治家は最も非感情的である可き故に、此の反対の両性が一身にあった子爵の如きは、政治家として最も大を致す人であったらうと思ふ。　①

震火災の第三日黒田清輝は被服廠跡の大惨事を独自に視察した。その翌日貴族院書記官長河井弥八は衆議院書記官長とともに本所・深川方面に踏み入り、被服廠跡も目撃にする。やがて罹災者への組織的な資金援助を主眼として、渋沢栄一の主導により議会と財界の連携が着手され、貴衆両院の代表と有力実業家から成る大震災善

① 松岡新一郎「外交家としての黒田子」『国民美術』（黒田清輝先生追悼号）、二五―二六頁。

後会が結成された。九月十一日東京商業会議所でなされた発起人会では、趣意書と規約が決議されるとともに、会長徳川家達をはじめ各種役員が選出される。なかでも活動の中核となる常任委員は救済部会十名と経済部会十二名として編成された。経済部会の部長には渋沢の娘婿阪谷芳郎が選ばれ、救済部会では当初青木信光が部長を務め、同じく貴族院から参じた黒田清輝もそこへ加った。

九月二十日に至り救済部会では青木が部長辞任の意向を表明し、以後黒田がその責務を引き継いだ。その前日勅令によって首都復興審議会の委員に任じられた青木は、やがて混迷する同審議会の渦中で渋沢とともに調停の役割を果たす。① 善後会における黒田の責務は格段に重要となり、議事の運営や救援の執行に一層忙殺されるに至った。家屋再建への支援、営業復活への貸付け、罹災者に対する保護や教導など会議の内容は多岐にわたって、第十回には鎌倉方面の当事者から災害の実状と支援の要望を聴取し、第二十回には善後会の主管医師たる北里柴三郎等から罹災小児の保護について要望を受けた。これらを記載した救済部会の議事録をつぎに若干抜粋する。

大震災善後会救済部会会議録

第九回救済部会

九月二十日正午より当所に於て開会

青木救済部長議長席につき開議

決議事項

一、来月開催せらる可き焼死者法会に関す件は部長一任すること

一、青木救済部長辞任の件は同部長に留任を乞ひ已むを得ざるときは黒田子爵代理すること

第十回救済部会

九月二十一日午前十時より当所に於て開会

黒田救済部長議長席につき開議

一、火災保険問題に関する件

政府に保険事業を官営となすの目的を以て速かに罹災者に対し火災保険金支払の方法を講じ救済復興の実を挙ぐ可し且小額被保険者に対しては全額の支払をなすこと

一、商工業復興資金の件

一、被害家屋再築並に大修繕費の件

右に就いても慎重攻究をなせり

第十七回救済部会

大正十二年十月一日午前十時三十分より当所に於て開会

① 『帝都復興史　附横浜復興記念史』第一巻、九一―九二、一八六―一九〇頁。

黒田救済部長議長席につき開議

一、木材配給方援助希望の件

黒田部長より黒岡帯刀氏を紹介し、同氏は鎌倉方面の罹災実状を語り、木材配給につき本会の援助を希望せり。

決議事項

一、芝浦、墨田駅、療養所等の実地視察の件

右は明二日午後一時より、雨天ならざる限り視察すること

一、バラックに関する件

右は字句を修正して可決

一、人心善導に関する件

右は之を可決し、字句の修正は部長に一任すること

一、対人信用貸出の件

右は字句を修正して可決総務部に提出すること

一、教育に関し文部当局を招き、罹災後の措置に付所見を聴取すること

第二十回救済部会

大正十二年十月十二日午後一時三十分より当所に於て開会

黒田救済部長議長席につき開議

罹災小児保護につき開議

一、黒田部長より北里宮島両医学博士を紹介し、両博士より罹災小児保護につき所見と希望を述べられたり

報告

一、中村幹事より明後十四日埼玉県下視察につき、多数者の参加を希望する旨報告ありたり

決議事項

一、来る十九日午後一時被服廠跡に於ける追悼会に大震災善後会として採るべき処置に関する件

右は総務部に一任すること

一、罹災地へ寄付金のうち金壱百万円を支出する件

右は原案通り之を可決す

一、災害防止の件

一、国民教育方針革新の件

右の二件は参考として総務部に提出すること　①

① 「(大震災善後会) 経済部会)『東京商業会議所報』第六巻第十号(一九二三年十一月)三二ー三四。および同書第六巻第十一号(一九二三年十二月)、二一ー二二頁。

これらの会議と併行して大震災善後会では、罹災の状況を把握し、救済の対象と仕方を確定するため、役員、常任委員、関係職員等によって数次にわたり視察が実施された。九月に東京市内、横浜、小田原などで調査したのに続いて、つぎに示すとおり十月には千葉県と埼玉県へ範囲が拡大される。なお、震災直後の難路でなされたこれら一連の調査に、高齢の副会長渋沢は自重して参加していない。

大震災善後会の被災地視察

六、十月八、九日（房総、湘南方面）

徳川会長、粕谷副会長、黒田救済、阪谷経済両部長、二条、青木、和田、伊沢、三土、田中、杉原の各常務委員、河井幹事其他天宅社会局書記官、大木衆議院書記官、久保貴族院嘱託、長山社会局属及白井・本目両東京商業会議所書記の一行は八日午前八時芝浦桟橋発軍艦鬼怒に便乗風浪を冒して正午小田原に上陸し町長の案内にて同町の被害及物資配給の実情を詳細視察したるか其惨状凄惨を極む　夫れより福浦村に上陸し被害状況を視察したるも真鶴視察は之を中止し伊東に向ひて航行せり　此時日既に没し且暴風雨襲来せし為同地上陸を中止し直ちに館山湾に東航し同夜は湾内に仮泊翌朝七時館山に上陸安達千葉県警察部長、大橋安房郡長、館山・北條両町長の案内にて両町を視察し夫れより山口那古・正木船形両町長の案内にて両町を視察す　此等房総地方の災害は最も激烈を極めたり　午前十時館山湾を抜錨し十一時過浦賀に上陸視察し次て横須賀に入港市中付近埋立地を視察したり　斯くて午後四時二十五分横須賀発列車にて帰京の途に就き午後七時五分帰京せり

七　十月十四日（埼玉方面）

徳川会長、粕谷副会長、黒田救済部長、青木、馬越、杉原、添田（寿）の各常務委員、中村、服部両幹事其他天宅社会局書記官、小林貴族院書記官、桐本社会局属、白井、清田両東京商業会議所書記の一行は午前八時駒込橋を出発し大崎埼玉県属の案内にて埼玉県下川口町に至り堀内知事より県下の被害、救済の状況を聴取し、更に鳩ヶ谷、越ヶ谷、粕壁、杉戸、幸手、岩槻に於ける被害及物資配給の実況を詳細視察したる後大宮浦和を経て午後五時帰京せり　①

こうした善後会の視察のなかでとりわけ十月八日から九日への旅行は、暴雨風に遭遇し、一行がいかに憔悴したかは想像に難くない。彼らは午前八時芝浦から軍艦に乗り、小田原の惨状を視察したのち、真鶴と伊東に向かうも両地への上陸を中止し、相模湾から浦賀水道を経て館山湾へ避難する。湾内で一泊した翌日、足を踏み入れた房総地方は、大地震の災害が極めて激烈であった。しかし、遠路難行の成果は被災地域への懇切な救済となって結実する。千葉県への資金援助に関する善後会の記録を参照する。罹災した当地の農業や畜産は、画伯黒田清輝と元来無縁のように思われるものの、救済なる絆によって堅く結合するのである。

① 『大震災善後会報告書』大震災善後会、一九二五年。四二一～四二二頁。

千葉県罹災地への資金援助（大震災善後会）

本会より千葉県に対し震災救護資金として交付したる金額は第一回六万円、第二回七万円、第三回十五万円計二八万円にして同県に於ては第一回分六万円は内二万円を水産物販売斡旋費に、一万円を職工紹介費に、其残高三万円は第三回分十五万円の内三万円を併せ計六万円を農村共同使用動力農具設備費に、第二回七万円は内三万六千円を農産物販売斡旋費に、五千円を千葉県育児園補助費に、一千五千六百円を商品共同収納費に、其残額一万三千円は第三回分十五万円の内一万三千円を併せ計二万六千円を畜産業救済設備費に、第三回分十五万円は前記三事業に補充したる四万九千円を控除して残額十万一千円となり其の内五千円を促成栽培復旧費に、五千円を水産物共同販売復旧費に、一万五千円を共同マーケット建設費に、二万円を罹災小学校設備費に、四万一千円を安房郡集会堂建設費に夫々充当したり。〔中略〕斯くして此等震災救護及復興事業を遂行していずれも良好の成果を挙げ得たり　事業の経過及成績の大要は左の如し。

（一）農村共同使用動力農具設備　震災に因りて農具を壊滅したる農家の共同使用に供する為め国庫補助に依る共同収納所及共同作業場の建設と相まって発動機其他脱穀機、籾摺機の作業機より成る動力農具一組宛を災害の程度に応じ各町村適当の場所に設備せしめたり。而して之が施設は県農会をして之を行はしめ已に十三年産麦の収穫期に利用し労力の節減は勿論収穫の其期を失せしめず品質の向上を促し、加ふるに共同作業の発達を促進する等其享受したる農民の利益頗る大なりとす。今本会交付金のうち六万円を以て震災地安房、君津、市原三郡下六七箇町村及一農会に共同使用動力農具百二十組を設置せる内訳を示せば左の如し

〔中略〕

（二）水産物販売斡旋　震災に因り東京に於ける鉄道貨物の滞貨、小輸送の秩序混乱したる関係より鮮魚輸送に上一大頓挫を来し漁業家の打撃甚大なるものあるを以て、輸送の迅速と運賃の低廉とを期し以て水産物の販売の活路を講ぜむ為、県水産会に本会交付金の内二万円を補助して之が施設を為さしめたり。県水産会に於ては各地の当業者並に関係者を網羅して実行委員を設け、各関係方面に夫々折衝を重ね、善後策を講じたる結果窮迫せる水産物販路も既に概ね震災前の状態に復するに至れり又一面に於ては内湾方面に饒産せる蛤蜊の販売途絶せるを以て栃木、群馬、山梨、長野等山間地方に之を搬出する計画を樹て、是亦実行委員を設けて試食会を催す等、栃木、群馬の両県に対しては既に之が宣伝を了し好成績を収めたり。而して爾余の各県に対しては逐次宣伝の予定なり。〔中略〕

（四）農産物販売斡旋　京浜の大震災に因り県下において饒産する甘薯は其販路を失ひ農家経済に及ぼ影響頗る大にして農民の困窮甚しきものあり。依て之が救済の為本会交付金の内三万六千円を県農会に補助し同会をして之が販売斡旋を為さしめ販路を阪神地方に開拓したり。之が為め搬出したる甘藷二万九千百四三俵、里芋四千四百十五俵の多きに達し、災後一時販路梗塞したる上記産物を有利に売却せしめたるのみならず一面管内に於ける価額の暴落を防止し農家をして財界の危険より脱却するを得せしめたり。

（五）畜産業救済設備　震災地に於ては農家唯一の副業たる畜産業の被れる損害莫大なるものあり。之が救済の為本会交付金の内二万六千円を畜産組合に交付し各種の救済設備を講ぜしめたり。すなわち ㋑ 安房郡牛畜産組合に対し共同搾乳所建設費の一部として二万円、家畜市場復旧費の一部として三千円計二万三千円を交付したり。然るに一面此等事業助成の為め農商務省に於て国庫補助の内議あり為めに之が決定をまって事業に着手せむとし諸般の準備整い居れり。而して共同搾乳所建設設計はコンクリート床木造瓦瓦葺平

屋建建坪十二坪にして其の建設予定地は保田、佐久間、岩井、富浦、船形、那古、八束、館野、九重、国府、健田、平群、千倉、七浦、、豊田、南三原、和田、江見、曽呂、西岬の二十ヶ町村にして家畜市場の復旧は北條、勝山、吉尾、南三原、鴨川の五ヶ町村所在のものなり。㋺　又君津郡畜牛畜産組合に対しては家畜市場、屠場及び種付所の復旧費として三千万円を交付し湊町所在家畜市場、木更津町所在屠場および八重原村所在種付所の復旧事業は既に完了を告げたり。①

これら救済活動における黒田清輝の尽力と心情は、以上に挙げた周囲の証言や一般的報告から推察するほかないが、震災時における彼の所感が僅かながら美術雑誌に見出される。関西を拠点とする雑誌『美術月報』大正十二年十一月号には、災害における文化遺産の防御について彼の談話が寄せられた。

黒田清輝「災後雑話」（『美術月報』）

大震災の破壊と同時にいろいろ改革の端緒が開けた。美術界に取つても思想上改革すべきものが多い。美術品でも貴重なものが多く焼失したことであらう。中にもそれを助け出したもの、如きはその働きを推賞せねばならぬ。大倉集古館の普賢菩薩を取り出したのや、井伊家の彦根屏風を取出したのは顕しい功績である。

① 『大震災善後会報告書』二〇〇―二〇一、二〇四―二〇五、二〇七―二〇八頁。

建築物では、ニコライ会堂や、虎ノ門旧工部大学などは立派ではあつたが、明治時代の洋風建築として勝ぐれたものであつたとしても、之を世界の名建築に比すれば、さほど痛惜する程ではない。惜しいのは聖堂であつた。

将来復活の気運に向つたら、聖堂は是非復活させたいものである。絵図も残つて居るのであるから、復活は不可能ではない。稍保守的ではあるが、一時は国家を支へた儒教思想の淵源で、崇高な地域であつた。丁度欧洲の或国でローマ賞を取つた美術家がローマのアカデミーに学ぶやうに、各国の代表的の学者が集まつて、此処に学んだのであるから、此処に学ぶものには自ら崇高な感が起つたであらうし、又各藩では此処に学ばせるのは高尚な誇りでもあつたのであらう。建築と制度と思想との関連するところの深い、一つの見本として復活させたいものである。

美術の教育に取つても之に鑑みて改革すべき点がある。即ち普通教育以上に、専門的な高い教育が必要である。英国のアカデミーの生徒の様にむつかしい試験を経たる少数の人が贅沢な教育を受けることの出来る様な所が必要である。

私は此度の大災でユーゴーの詩を思ひ出した。それはルーヴル王宮の死に就て謡つたもので、ルーヴルを護衛する兵士が王の生命を守護することは出来ないといふので、つまり自然の力はとても限りある人の力では拒げないといふのであるが、私はそれを反対に考へた、自然力に対して人力が、も少し勝ち得べきであつたと思ふ。精神的に美術品の貴重なるものを守護したならば守護し得たであらうと思ふ。御宸影を守護するが如きは、極端な例ではあるが、今度の火災も若し拒ぐといふ観念が強くあつたらば、もつと拒ぎ得たと思ふ。必しも堅牢なもの、中に置かねばならぬと云ふことはない。

美術品を守るにも国家の貴重な宝を預つて居るのであつて、個人の私有物でないとの観念で之を守護する精神的の力が強かつたならば、人力に依つて、もつと保護することが出来たと思ふ。

勿論、物質的に保護することも必要ではあるが、物質的の保護法では、種々の変化ある災害に応ずることは出来ない。どうしても精神的に保護しなければならぬ。それには人間の気分を健実にしなければならぬ。社会の組織が健全でなくてはならぬ。

英仏の如く、名作を外国に出さないやうに、若し売物の名品が出た場合には、私立の会などの力で買ひ戻す、世利などに出る名品は買ひ取つて博物館に納める様なことをして居る。そんな美術品を重んずる思想があれば、必しも蔵でなくても、バラツク式なもの、中に保管せられてあつても安全であるかも知れない。

美術品の焼失に就ては世界から深く惜まれることであらう。

美術館の必要なことは、単に美術品を集めて置く為ではない。美術に対する国民の尊重の観念を高める為に必要なのである。社会を教育する為に必要なのである。

若し美術を尊重し之を保護する観念が強くないならば、美術館は必しも安全でないから、却つて美術品を集めて之を一炬の火に付する患がないとは限らぬ。

往々世間では日本の文化が進んで居たから天譴が来たといふ様な説もあるが、併し欧羅巴の大戦争が文化の極度に達して起つたのとは大に趣を異にして居ると思ふ。勿論日本では浮薄な無駄な虚栄を追ふ様な風はあつたが、文化が進み過ぎるといふまでに達しては居なかつた。寧ろ小成に安んじて居たのを警められた様な感がある。居眠りをして居るのを打ちなぐられた様なものである。それ故に決して消極的になるべきでな

い。唯だ浮薄を戒めて慎重にならねばならぬと思ふのである。（談）　①

つとに明治四二年黒田はフランスのアカデミーに類した学術機関を設置し、展覧会開催による美術奨励とともに古い建築物の保存や国宝の保護を行うよう政府に要望していた。また、大正に至り美術館設置のさまざまな構想のなかでは、ルーブルの如き国立美術館が必要であり、古代現代を包括した大きな目的に向かうよう強調した。②　大正八年文部省は美術の発展に供するため帝国美術院を設置し、初代院長森林太郎と黒田など十三名を任命する。震災の前年九月森が逝去し、後任に黒田が就任した。「わが国における美術行政について、」と隈元謙二郎著『黒田清輝』には記述される。「彼が高邁な識見を持っていたことは、その経歴、思想、その地位から推察されるが、院長として帝国美術院を自ら統率することになって、その責任はきわめて重大となり、また作家側からすれば、技術家出身の最初の院長であった彼に対する期待ははなはだ大きかった。今日彼の抱負を知る資料は乏しいが、その日記のうちに記された帝国美術院新案と推測される箇条書の草案は、彼の当時の思想をうか

① 黒田清輝「災後雑話」『美術月報』第四巻第十一号、大正十二年十一月。（「黒田清輝関係文献目録　定期刊行物」東洋文化財研究所、黒田記念館。online.）

② 黒田清輝「座談　美術院の設立を望む」『新小説』明治四二年四月。四五九頁。online.

広瀬熹六「美術館建設運動の経過」『中央美術』大正八年一月。六五三ー六五八頁。

がうことができるものである。」①

積年にわたる政治活動、なかでも大震災善後会における救済への采配が、その体力を減退させたと思われるなかで、黒田が狭心症で倒れたのは、宮内省における勤務中である。明治四二年黒田は皇室の美術家優遇である帝室技芸員に洋画分野から初めて任命された。さらに大正二年宮内省から調度寮嘱託を命じられ、以後皇室の写真撮影を監修する。こうして写真技師の試験、採用、指導にも立会い、大正天皇と貞明皇后、さらには他の皇族のご真影を制作させた。②『黒田清輝日記』を構成する最後の月日には、皇室関連の用務がつぎのように記録される。

『黒田清輝日記』一九二二年（大正十一年）九月―十二月抜粋

九月二七日　水　曇　摂政宮殿下上野行啓　零時四五分　院展　二科会　霞関離宮石井柏亭君同道
情報部伊集院男訪問　安楽兼道氏来訪　夜岡野氏来談

九月二九日　金　北白川宮妃殿下拝謁三時―五時　二時黒田侯・青木子同道　午後十時法相　晩餐内相
堀田催星ヶ岡茶寮六時　六時徳川侯邸 reception　四時半平河町小笠・青・木二子伯

① 隈元謙二郎著『黒田清輝』八三―八四、八七頁。

② 同書。七三、七八頁。

十月二二日　日　近衛公六時華月　午前七時五十分東宮殿下帝展御成　早川九時―十一時

十月二三日　月　午後秩父宮楓山御写真一時御出門　賞勲局外国勲章佩用免許証交付

十月二七日　金　聊娯会展覧会　午前九時御出門皇后陛下帝展行啓

十一月四日　土　摂政殿下御写真一時半

十一月八日　水　澄宮殿下御写真十二時半　錦水中川六時

十一月二四日　金　宮内省　銀行

十一月二九日　水　四時半雨潤会於会館　山階宮赤坂離宮賜謁二時―四時

十二月十七日　日　一時秩父宮御写真　南州会（上野）三時半（海軍大臣官邸）

十二月十九日　火　親和会中川男　三島蔵相　香雪軒　根津氏邸拝見会　葉山行幸啓　十一時広田氏

十二月二一日　木　司法大臣交友倶楽部　浜町常盤屋五時半　十時半中島久万吉男　三時半宮内省写真
陳列　二時研究会陪審法案

十二月三一日　日　（箱根迎年日記）午前参内　歳暮の御祝詞を申し上げ午後青山墓参　後ち青木男爵を
訪問し暇乞をなし帰宅早々宮田幹長の来訪に接し問題の形行を聴取しここに今年の用
事を了へて六時三六分新橋を発し箱根湯本福住に泊る　①

① 『黒田清輝日記』第四巻、中央公論美術出版、一九六八年。（東洋文化財研究所 online）

宮内省で発病した黒田清輝は、入院後しばらく小康を得て、翌年二月に麻布の自邸へ戻った。震災の年なる画業としては五月完成の「薔薇」をはじめ「挹芳園」、「しゃくなぎ」、「紅葉」、「雪（松アリ）」が遺され、翌年の遺作「梅林」および「林」は未完成である。① 国民美術協会の機関誌『国民美術』大正十三年三月号には病床における黒田の所感が掲載され、そこにはなお深慮と気概が秘められる。

黒田清輝「春日閑談」（『国民美術』）

二月初旬のある日の午後、麻布笄町の別邸に、黒田先生を訪ふ。昨年末から今春へ掛けて絶對安静にせられたので、御容態は非常に良好であると云ふ。取次ぎの人の話を聞いて安心して、病室である南向きの中二階に案内される。次の間に未だ白衣の看護が詰めて居るのは、さすがに病室らしい氣分を與へる。先生は東の小窓を頭にして、二尺もある様な布團の上に仰向きになつて、可成り重量のある、王建章の面帖を見ておられたが私が入ると、靜かに本を下して、其上から殆ど平常通りのつやつやしい顔を出され、半身を起して座布團を進められるのであつた。如月初めとは云ひながら、今日辺りは四月頃の様に温い日が障子一ぱいにさして、床の間の牡丹もこぼれる様にに、枕元の鉢植の梅は丁度満開である。靜かな午後、話はなかなかにつきない。

① 「黒田清輝作品集」東洋文化財研究所。online.

今年は鉢植ながら、梅の花を染々眺めましたよ。二三年來は殊に梅から桜の時に掛けて議會で忙しいものだから、いつも花を見ずじまひでしてね。こゝの窓の外にも老梅があるのだが、一向見ない内にいつも散つて了つてる。ことしは梅をゆつくり見たいと思つてゐますよ。

日本画とちがひ洋画では、梅の花はどうも面白くなくてね。・・・私は確か一度位しか描かない。桜にした所で、東京の白つぽいのはどうも余り感心しない。京都辺りの色のよいのが、遠山か何かに、ぽつと見えるのはよいものだがね。どうも洋画には面白くいかんやうに思ふ。

◇　◇

雑誌の方で段々お忙しからう。二三の新聞や雑誌にも出た様だが—確か内田魯庵君辺りも書いて居た様だが—震災に依つて破壊せられたり焼失して了つた美術品を一つ正確に調査して記録しておくと云ふ事は、美術史上必な事と思ふが、あの當時はいろいろ誤伝もあつた様で焼けたと思つたものが、殘つてゐたり大丈夫と傳へられたものが、亡くなつてゐたりしてゐると思ふが、もう世間も靜まつたから、一つ調査して貰ひ度いものだと思ふ。

◇　◇

それから震火災の時、美術品を危險を犯して取り出したり、保護したりした、隠れた人々の功勞を調査して、大に賞揚したいね。何んでも「彦根屏風」をひどく苦勞して取り出したのを誰れかゞつまらぬ事だなどと云つてゐたのを、見たに思ふが、美を保護すると云ふ上からは今度の様な時に盡力した人を調べて其功績を永く記録して置きたいと思ふ。

◇　◇

復興の事等も漸次、緒に就いて居ると云ふ事だが、美術上、又文化上の特別の記念物―例へば聖堂やニコライも其内に入るかも知れぬが―湯島の聖堂の様な大切な、特殊のものはどうなつてゐるか、そろそろ復興しかけてゐるかね。なに未だやつてゐない。それは遺憾だね。あの建築築は我國の建築史上は勿論化文化史上非常に重大な意義のあるものだから、先づ第一に復興する必要がある。確かあれは、正確なプランがある筈であるから、愈々復興となれば、最も手早く出來る筈である。少し雑誌上でも眞面目に論議して促しなければいかんと思ふ。

◇　◇

何れにしても大分、身体の具合もよいから、其内に床上げをして、諸君と一夕歡談をして、大に斯界の爲めに盡さねばならぬ。いろいろ美術界にもしておかねばならぬ事が多いよ。又問題も多々ある。

梅の花が咲いて終った頃は、多分床上げをして、諸君と久濶振りで話さう。　①

四月頃にかなり恢復した黒田は箱根でしばらく静養し、五月末に帰京してインドシナ総督メルランの来朝を接待し、国民美術協会の展覧会をも支援する。しかし、六月三日に喘息を併発し、同月末脳溢血により重態となった。

① 黒田清輝「春日閑談」『国民美術』第一巻第三号、大正十三年三月。（「黒田清輝関係文献目録　定期刊行物」黒田記念館。online.）

田辺孝次「御葬祭前後」

黒田清輝先生には久しい前から、糖尿病の宿病があったが、先生は平常身を持すること謹厳、非常に慎重な態度で注意をして居られた為め、事無きを得て居ったが、近年政治界入られてから、御生活も多少不規則に成られ、殊に昨年大震災以後非常な激務に従事された為め、今春以来、麻布笄町の本邸に静養に努められていた。其の結果一時大に快方に赴かれ、庭先の散歩位には出られる様になり、客にも応接間でお会いになる様に成った。

丁度此頃先生の御尽力で仏領印度支那協会の賓客としてメルラン総督が来朝され、先生は同協会の会長であるから、大に斡旋に努められ、御陪食にも列席され、其他の宴会にも出席された。又其と前後して先生が会頭である国民美術協会は六月一日上野公園桜ヶ丘で第三回仏蘭西現代美術展覧会を開催したが、開会早々ロダンの「接吻」が陳列撤去を命ぜられる様な事があり、これも先生が平常の考えである日仏親善の問題に関係があるとて、病中を推して奔走され、また会場にも親しく出て来られたりしたのであるが、これが為めに余程疲労をせられたと見えて、六月十日頃より病勢旧に復し、再び面会謝絶をされて只管療養されつつあったが、六月三十日の朝突然脳溢血を起され御重態の状態になられた。

此報が一度び伝はるや、知己門下の人々は雲の如く笄町に集って愁雲深く邸の内外を取巻いた。主治医の吉本、三浦、渡辺等の諸博士は頗る適切な治療を行って居ったが、日を経るに従って、食欲が減退し、元気

が漸次衰弱して来る事を発表せざるを得なかったのである。日に再三発表せらるる此の容態書は、詰め居る見舞客の間に、沈黙の内に電光の様に行き渡って、何れも極度の心痛で、愁ひの雲は愈々深く邸の内外に垂れ込めた。

家族の人々を初めとして、親族の人々、家職の人々、医師看護婦やさては見舞の人々等の手によってあらゆる方法が講ぜられた。知己や門下の人々は当番の日割を作って、毎日昼夜を分かず邸に詰めて大に警戒努力したが、遂に其甲斐なく七月十五日午前四時十五分、東天紅を染める頃　溘焉（こうえん）として薨去せられた。邸の内外は一時に色を成し、詰め居る人々は悉く皆泣いた。　①

…

① 田辺孝次「御葬祭前後」『国民美術』（黒田清輝先生追悼号）、七八ー七九頁。